

森のふくろうへの独言

柳田国男生誕百五十年頌 肆

小田 富 英

届くか

わが無音の独言

聴けるか 翁の再生の詩

翁生まれて百五十

目出度いわけでもなからうが

今ここにいたら何と言う

時々想いをめぐらすのも悪くない

百五十とはそういう数だ

では

無音の詩片でそれが可能か

年の終わりに試してみるのも悪くはなからう

翁は一度訪れた山里も離れ小島の渚の村も

一幅の絵画のように記憶して

そのカンバスには

暮らす村里の香まで染み込んでいる

そうだ

きつと

翁は絵画のなかに心を

しんしんと浸み入れたかったのだ

ある山里の白い病棟で

消えていく自らの命の

先をなぞりいつかまた

波の音と色とに包まれ

静かな海の香を手にし

透明なちいさな願いを

翁に語った少女の事件

海辺の宿の小宴のなか

海よりも山里の方がどんなに

心休まるかと言いつ出した赤顔に

山里で今もどこかに静かな海があるのかしらと

静かに目を閉じた少女を思い

翁が詠んだ唄を年の終わりにつぶやいてみる

海に居て深山ゆかしといふ人に

つげばや津具の旅ねがたりを



角

詩誌

第69号